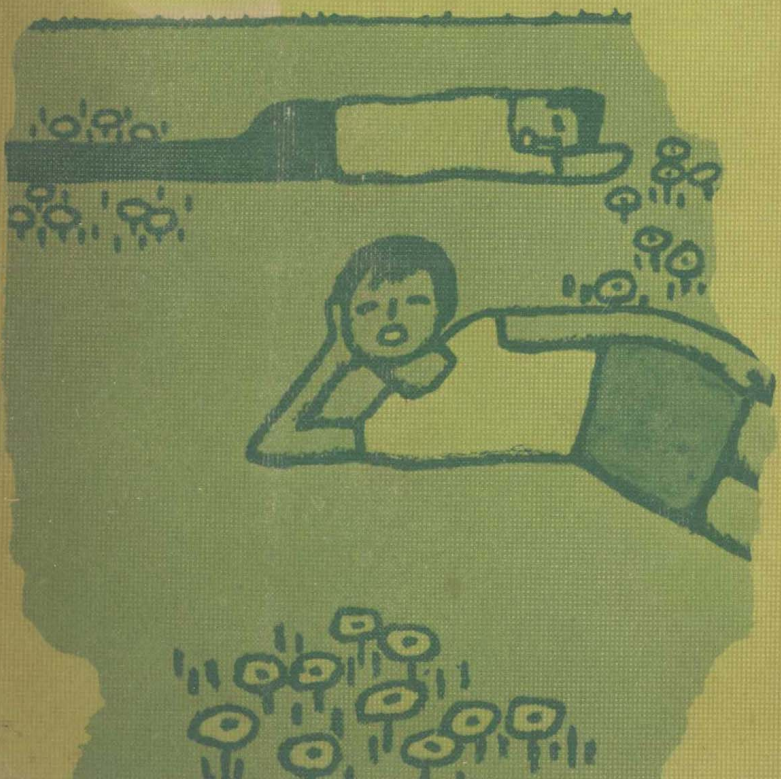
青春はいじわる

●佐藤愛子



青春はいじわる

昭和44年 7 月15日　初版印刷
昭和44年 8 月12日　初版発行

著　者　佐藤愛子

定価 280円　発行者　陶山巌

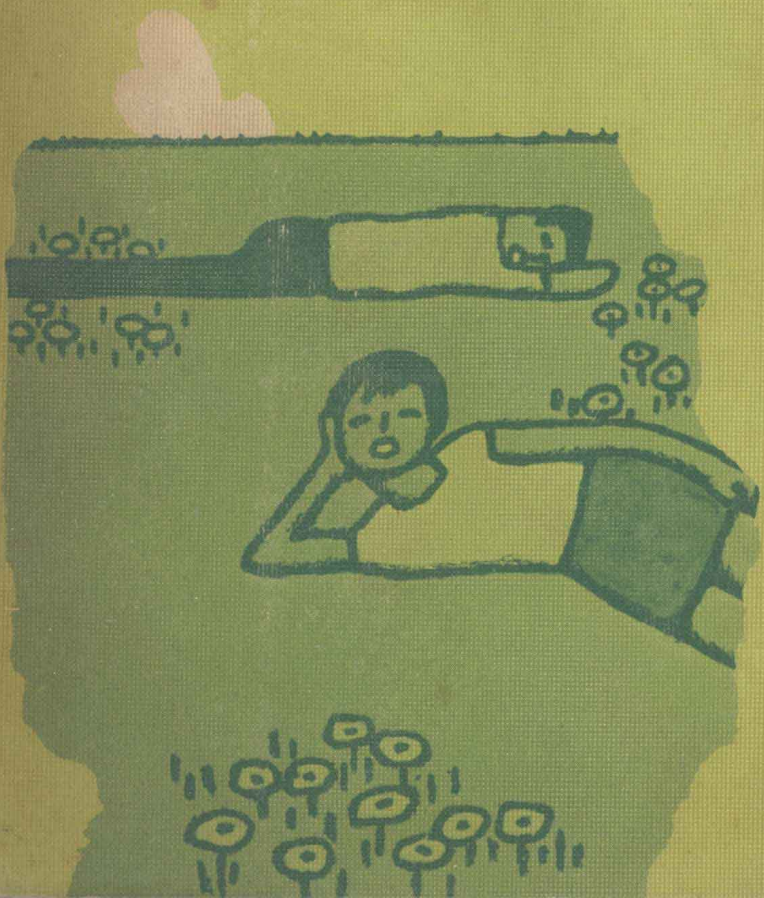
印刷所　大文堂印刷株式会社
望月印刷株式会社

発行所　東京都千代田区
神田一ツ橋2—3
郵便番号 101
株式会社　集英社
電話 東京(265)代表6111
振替 東京 1 5 6 5 3 番

© 1969 PRINTED IN JAPAN　著者と了解のうえ検印を廃止します

青春はいじわる

●佐藤愛子



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

青春はいじわる

昭和44年 7 月15日　初版印刷
昭和44年 8 月12日　初版発行

著　者　佐藤愛子

定価 280円　発行者　陶山巌

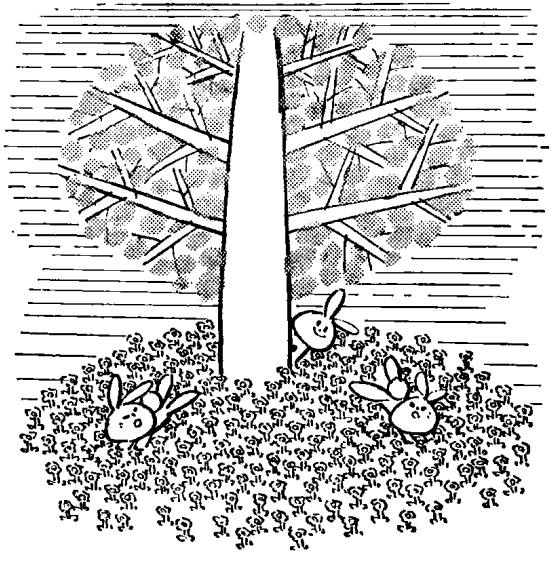
印刷所　大文堂印刷株式会社
望月印刷株式会社

発行所　東京都千代田区
神田一ツ橋2—3
郵便番号 101
株式会社　集英社
電話 東京(265)代表6111
振替 東京 1 5 6 5 3 番

© 1969 PRINTED IN JAPAN　著者と了解のうえ検印を廃止します

青春はいじわる

佐藤愛子



集英社

目次

青春はいじわる……9
レロレロ早春譜……63
かなしき笑い屋……111
おせっかいの序章……127

AD　三谷明広
装丁　宮田武彦
さしえ　池原昭治

青春はいじわる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ウンペイとおムツ

このごろ、睦子は馬場運平がシャクにさわって仕方がない。なぜシャクにさわるかときかれると、答えに困るくらい何もかもがシャクにさわるのだ。

まず第一に睦子は運平のノッソリしたところがシャクにさわる。運平はヌーッと大きくて手足が大きい。リンゴをつかむと、手のなかに見えなくなってしまうのではないかと思われるくらい大きい。朝礼のときなんか、全校生徒が整列すると、高校二年のシンガリで、三年生を見おろすようにニュッと首が出ているのだ。

「こらッ！　そこの大きいの、ノソノソするな、さっさと歩くんだ、さっさと！」

体育の加藤先生はどういうわけか運平を目のカタキにしていて、何かというとどなりつける。

「こらッ、大きいの、まだべんとうを食ってるのかアッ、あきれたやつだ！」

と、通りすがりに教室をのぞいてどなっていく。

「おべんとうをどう食べようと、よけいなお世話よ、ねえッ？」

とクラスの女の子のなかには運平に同情する者がいる。運平はおとなしくてノンビリしているので、運平をヒイキにしている女の子は少なくないのである。

「ヒゲノミは自分が小さいものだから、馬場クンをねたんでいるのよ」

という女の子もいる。ヒゲノミというのは加藤先生のニックネームである。小さくてよく跳ねるからノミだ。加藤先生はどうやら自分が人一倍小さいことに劣等感を持っているらしい。その劣等感をおぎなうために、三、四年前から貧弱な口ヒゲをはやしはじめた。機械体操が得意で、体育学校にいたころはオリンピックの選手になりかけたというのが自慢である。なったというのが自慢ならわかるが、なりかけたというのが自慢というのはあまりパッとしない。

「大学の入試に合格しかけたがおっこちた」

とか、

「好かれかけたがフラれた」

などというのと同じようなもので、あまり自慢になることではないと思うのだが。

しかし睦子はヒゲノミが運平をいじめたくなる気持ちがなんとなくわかるような気がする。実際、運平が眠そうな目をしてノソラノソラと歩いて行くうしろ姿を見ると、うしろから走って行って、そのノンキそうなおシリを思いきりけとばしてやりたくなるのだ。

「しっかりしなさいよ、ウンちゃん！」

睦子はそう叱りつけずにはいられない。すると運平は少し困ったような顔をして、

「なにが？――」

という。そうきかれると睦子はことばにつまり、

「とにかくさ、歩くときでも、テキパキと歩いてほしいわね」

と大声を出さずにはいられない。

馬場運平は牧村睦子の唯一のボーイフレンドなのである。小学校のときから高校二年の今日まで、睦子は運平のほかにボーイフレンドというのはひとりも持ったことがないのだ。そういうと心の底から、睦子は運平が気に入っているようだが、実は気に入っているというより、やむを得ず運平をボーイフレンドにしているというのが実情なのである。つまり、はっきりいってしまえば、睦子にはボーイフレンドのなり手がないのだ。

「牧村睦子か……かわいいところはあるんだけど怒りっぽいんでねえ」

と男の子たちは敬遠する。睦子は親ゆずりの短気が欠点である。睦子の父は歯科医だが、ムシ歯の治療に来た患者はたいてい一度は叱られる。

「手入れが悪いからこういうことになる。なんだ、この歯は！　けしからん！　なんでいままでほっといたのだ」

という調子だ。ウデはいいという評判だが、こどもはこわがってほとんど来ない。

「そんなことをすると、牧村先生のところへ連れて行くよ」

町の人たちはいたずらッ子をおどかすのに、そういって睦子の父の名を使う。するとこどもはピタリとおとなしくなる。抜けにくい歯の持ち主は、治療の間じゅう、睦子の父の激怒の集中攻撃を浴びねばならない。

「けしからん！　なんだ、この歯は！　まだおれに手向かっておる！」

そうして抜くときは、
「クソーッ！」
といって抜く。
「このヤロウーッ」
とどなることもある。患者は痛い思いをした上に「すみません」といってあやまらなければならず、その上、治療費を払わなければならないという、はなはだワリの合わない目にあうのだ。
睦子はその父に似た。
「おとうさんたら、いやァねえ、どうしてあんなに短気なの！」
といいながら、睦子もよく腹を立てる。何よりも睦子はノソノソしているのがきらいだ。これも父ゆずりで睦子はせっかちなのである。歩き方も早い。頭の回転も早い。しゃべるほうも早い。手も早い。あっという間に相手をつねって、むこうのほうですましている。相手の急所をグサリと突くようなことをいうのが得意だ。負けずぎらいでもある。
「神田クン、キモチはわかるけれど、いくら大股で歩いても、足は長く見えないのヨ」
などという。神田クンは足を長く見せようとして、年じゅう、体操の白ズボンをはいている。白ズボンをはくと足が長く見えると教えたのは睦子なのだ。白ズボンをはいた神田クンはすごい大股で歩く。大股で歩いた歩幅を見ることによって足が長くなったつもりになっているらしい。睦子はそれを見て笑っているのである。
神田クンは一時、睦子に接近しようとしはじめたことがあった。だがまもなく神田クンは遠ざかっていった。睦子は神田クンの痛いところを突きすぎたのだ。こうして睦子は好むと好まざるとにかかわらず、小学校時代からの友だちである運平をボーイフレンドにしているのである。

学生ならばだれしも夏休みの来るのがうれしいにきまっている。夏休みといえば、一年じゅうの休みのうちでいちばん長い。その長さもうれしいが、夏という季節であることもうれしい。
夏は遊ぶためにある季節だ。冬休みや春休みはいっ

かりしていると、まるでイジワルなカンニング監視役みたいに、いつのまにかノッソリと最後の日が目の前に来ていたりする。その点、夏休みはいい。夏休みの終わりは遠くのほうにあって、まるでペロペロ飴みたいに、いつまでもなくならない感じがあっていい。

ところがそう思うのは一般の学生であって、睦子は夏休みがきらいである。夏休みになると退屈でしようがない。睦子の家には父と母のほか節子という中学校三年の妹がいるきりだ。この節子がガリ勉で、小学校から大学まで首席を通すということを目的としているような妹なのだ。いつもまじめくさった顔をして本を読んでいる。

『叡知はただ真理のなかにのみ存する』

などということばを紙に書いて、机の前の壁にはったりしているのだ。そうしてその下で毎朝、英語のリーダーを開き、流暢にペラペラと朗読し、大声で訳し、それから突然、睦子に向かって英語で話しかける。

何がイヤといって睦子にとってそのときほどイヤな気持ちがすることはない。くやしいが睦子にはその質問に英語をもって返すことが不可能である。節子は、将来、ハーバード大学進学を夢みており、そのために英語の個人教授について猛烈な勉強をしているのだ。節子の英語の実力は姉の睦子をさらに追い越しているのである。

夏休みになると睦子は何かにつけてこの妹から圧迫感を受ける。節子のほうは圧迫しているつもりはないのだが、睦子が勝手に圧迫を感じているのだ。片方がまじめくさって勉強しているのに、片方がゴロゴロ寝ころがっては、塩センベイをかじりかじりテレビを見たり、コドモのマンガ本を読んでゲラゲラ笑っていてはどうも具合が悪い。しかも、それが姉のほうなのだからいっそう具合が悪い。

「節ちゃん、勉強もいいけど、ほどほどにしとかないとからだをこわすわよ」

おりにふれ、母がそんなことをいうのも睦子にはおもしろくない。睦子が母から『ほどほどにしとかないと』などといわれるときは、たいていは西瓜を食べているときとか、枝豆を食べているときにかぎられているのである。

と、まあ、そういう次第で睦子は夏休みがきらいな

のである。はじめのうちは朝寝坊ができるのでうれしいと思っているが、それもせいぜい二、三日のことで、四日目あたりから早く学校がはじまらないかなアと思いはじめる。睦子にとって学校は勉強する場ではなくて、遊びに行く場なのだ。睦子は家にいるとションボリしているが、学校へ行くと元気づく。睦子の友だちには、いきなりまじめくさって英語で話しかけたりするような無粋な友だちはひとりもいないのである。

夏休みにはいって一週間目、うだるようなムシ暑さのなかで、睦子は二段ベッドの上の段に寝そべって、足で枕をけりあげては天井にぶつけながら退屈をもてあましていた。毎月、月の五の日ごとにもらう五百円のおこづかいを、睦子は三日間で使い果たしてしまったのだ。あとはアルバイトでも探してくる以外に、二十円のアイスクリームひとつ買えない状況にある。

節子に借りようかナ。

どうしようかナ。

そう考えながら睦子は足で枕をけりあげ、天井にぶつかって落ちてくるのを足で受けとめ、またけりあげるという技をくり返していた。お金がなく友だちもいないとき、睦子はこの枕けりをしてあそぶ習慣がいつのまにかついてしまった。

借りよかナ。

どうしよかナ。

枕をけりあげながら、それを三十回くり返す間に、もし枕を受け損じたら節子に借金を申しこもう……そう思いながら思いっきり強く枕をけりあげたとき、

「さあ、どうぞ、へやにおりますから、おはいりになって……」

階下で母の声がした。

「節子、宮本さんがおみえになったわよ」

「わっ――」

と叫んだのは二段ベッドの上の睦子である。睦子がいま、思いっきり力まかせに枕を天井高くけりあげたところなのだ。へやへはいってきたのは睦子の高校の三年生である宮本士郎だ。淡いグレーのズボンに真っ白なポロシャツがよく似合う。睦子のクラスの横山志津子が、士郎のためにこういう歌を作ったことがある。

おお、白鳥のきみよ、

夜明けの星よ、
きみのうなじは若竹の青、
きみの瞳はおウマの目
ああ、その微笑みの雄々しさよ
わが心はしおれぬ、しぼみぬ、
おお、きみよ！

つまりおウマの目を持つ、白鳥のようでもあり、夜明けの星のようでもある宮本士郎がほほえむと、横山志津子の胸は悲しみにつぶれる。なぜならばその雄々しき微笑は、志津子に向けられたものではないからである、というこれは片思いの歌なのである。

士郎は睦子と同じ二年B組の宮本実春のひとつちがいの兄である。宮本病院の三きょうだいといえば、この町で有名な美貌のきょうだいで、いちばん上の姉は美貌を見こまれて東京の政治家の長男に嫁ぎ、末娘の実春もまた西山高校の男生徒たちがさわいでいる美少女である。その姉と妹にはさまれた士郎は、宮本家のたったひとりの男の子で、父の経営している宮本病院の後継者でもある。

西山高校では士郎に憧れている女の子は少なくない。士郎は中学三年のときに、県下の中学生代表として英語の弁論大会に出て優勝したことがあるくらいの語学力の持ち主である。士郎の特徴は一見してもの静かでおとなびた雰囲気を持っていることだ。上品な鼻筋といかにも利口そうな広い額。髪がまるで女のようにやわらかそうで、目も女のようにやさしい。

「へえ、あれがねえ……ハンサムかねえ。白鳥のきみかねェ」

睦子は何度かそういって志津子にいやがらせをした。睦子は士郎を見ると理由もなくムカムカする。通りすがりにそのよく磨いた靴のさきをふんづけて通ったことも何度かある。

「ハンサムなんてオトコの恥よ」

というのが睦子の持論だ。だがその根拠はとりたてて何もない。睦子は士郎にかぎらず美人とかハンサムとかに反感を持っているのだ。秀才とか先生のお気に入りとかもきらいだ。学級委員になるような生徒は軽蔑することにしている。また睦子はお金持ちもきらいだ。自家用車を持ってる人、おこづかいに不自由した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com